

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

崑崙山脈「阿克沙衣峰」(6770m未踏)偵察行 その2

ウルムチの一日

7月26日 終日打ち合わせ。朝は早く(8時)目覚めたので、町を散歩してみる。まだこの時間だと町は動いていないが、幹線道路の「河灘路」を行く車は引きも切らない。こぎれいな車が増えたというのも今までとは違うウルムチの印象だ。9時から10時まで朝食をとる。ここで改めて言っておきたいが、正式の時間は北京時間で動いているが、実際の生活はそこから2時間遅れの新疆時間を使うというのが新疆のルール。だから、新疆では朝飯は大体9時過ぎ、昼は2時、夕食は早くても9時くらいというのが通常のパターンなのだ。カシュガルあたりではそれでもまだズレは大きく、夜は10時半(北京時間)になってもまだ日は暮れないから、なかなか体感的に時間を受け入れることが難しい。

10時30分、ヌル、周両氏とともにヌルさんのオフィスである「中青旅行社」へ赴き、今後の日程について打ち合わせ。その後、周さんの案内でウルムチ市内の登山用品店を回り、登山事情を視察。店の数は多いが、品物の質は雑多。何件も回れば、一応のものは揃うと見たが、しかし品質については、ブランドのタグや品質表示タグがついていても、まがい物も多そうなので要注意ではある。あらかじめヌルさんからも連絡を受けてはいたが、やはり装備については、ネパールなどとは異なりこちらで調達することはあまり実質的ではなさそうだ。しかし、ウルムチ市民もハイキングなどを楽しむことはしていることが知れ、その点では新疆も明らかに豊かになってきていることは感じた。

14時、ヌルさんの家族も交えて食事。たまたまイリから来ていたヌルさんのお母さんと弟、ウルムチで医学生をしているという兄の子、それに奥さんのズリパールさん。ズリパールさんはかつて我が家に泊まってもらったこともあり、妻とも意気投合していたこともあるので、お土産として日本で妻に選んでもらったスカーフと妻の手作りの松本手鞠を渡した。ヌルさんのお母さんはいかにもウイグル族らしい紺色のアティリスで作ったドレスがお似合いだった。こちらには久根さんが持参した日本風情のあるハンカチをお渡しする。シシカバブ、ポロ、ラグ麺にいくつかの皿盛のウイグル料理。いつ来てもウイグル料理は日本人の口にあう。入山を控え腹八分目を旨としたいが、つつい食べ過ぎてしまう。注意せねば!

午後は、大バザールへ出かけた。カシュガルやホータンのそれとは違い、かなり観光ナイズされたこぎれいなバザールである。昨年の騒乱の火元でもあり、そのあとを消すのに当局は相当金をかけたのだろうと思われる。そうしてみると町のそこそこには、交差点などに監視カメラも見受けられる。ウルムチ市内だけで4万台というのもあながち誇張ではなさそうだ。この大バザールはホテルからも近いので、夕食後久根さんを誘ってもういちど訪ねてみたが、夜は紫色にライトアップされ、幻想的な砂漠のイメージが醸し出されてい



夜の大バザール

た。そんな点でもこの10年間の変化には驚いた。

カシュガルで入山準備

7月27日 まだ明けやらぬ5時50分、ホテルをチェックアウト。ウルムチ空港に向かう。7時40分に離陸した南方航空機は、10時20分にカシュガルに到着。2000年隊のときにも使ったサマンホテルにチェックイン。その後、カシュガルのエージェントで社長の董さんと打ち合わせ。董さんはもとカシュガル登山協会にいたとのことだが、我々が入境する地区の軍事チェックポイントである「庫地(クディ)」の様子やそこを通過する際の来年度も含めての便宜などについて、ヌルさんも交えて詳細な情報を得る。これからずっとお世話になるドライバーの秦さんもこちらを通じての手配である。

その後、市内へ食糧の買出しに出かける。カシュガルでは、行動食に関してはほぼすべてのものが手に入るが、カロリーメイトやゼリー飲料、アルファ米、フリーズドライ系の食品はなかった。またジップロックは見かけなかった。したがって食糧に関しては来年も高所食は持参せざるを得ないものの、それ以外はカシュガルでの調達で問題がない。そしてなにより安くあがる。ここ10年で品数も品目も爆発的に増えていた。

食事の後、周さんと連れ立って、エティガル寺院、職人街へ。エティガル寺院では思わぬ初体験。私が入場しようとする、だめだと言われた。たまたま短パンを履いていたのだが、何でも足を見せて聖域に入るのはご法度とのこと。一枚のアティリスを渡され、これを腰に巻けとのご託宣。思わぬところで、スカート様の腰巻を巻くことになった。なんとも不思議な気分。新疆で一番大きなモスクは言わずと知れたここエティガルであるが、門前には平日であっても多くのムスリムが集まってきている。カシュガル地区はもちろん、新疆全域の一大聖地である。きれいに清掃された境内は、木陰をさわやかな風が吹きぬける。金曜礼拝の時の様子は想像する術もないが、信仰について考えさせられる空間ではある。モスクの左手に広がる路地は、いわゆる職人街である。ここはいつ来ても、どこを見ても見飽きることのない不思議な空間だ。伝統的な楽器、帽子、曲げ物、木材加工、銅製品の細工、ブリキの加工などなど、様々な技術の粋が目の前で展開していくのは見るだけで楽しい。熟練した職人に混じって、まだあどけなさの残る少年が親方の仕事を見よう見まねで身に着けていく。その場で作られた製品が並べられた店さき。大量生産ではない手作りの心のこもった愛すべき品々。やかんひとつ、帽子ひとつがいとおいしく感じられる。

夜は屋台に出て、カシュガルの夜を満喫する。おいしいシシカバブとその周辺料理にビールも進む。だが入山を控えて、少しずつ体調を整えるべく自重はしなくてならない。しかし、どこへ行ってもウイグル料理はうまい。昼はこのところずっと、ラグ麺。これとて店により多少のバリエーションがあり、決して飽きることはない。そして夜は連日屋台。この日はウイグル人の大好物といわれる「面肺子」に挑戦。羊腸に米をつめたものと、羊肺に小麦粉をつめたものを煮込んだ料理だが、久根さんは一口手をつけてギブ、小生は薦められるままに結構食べたが、多分これが原因で翌日から大変なことになる。

2000年登頂に失敗した我々だったが、ここカシュガルで重田さん、清水ドクターと食事の後街に繰り出して、たまたま床屋の前で開いている屋台で飲んだのだが、その場所の前で往時が思い返される。そこの主人にえらく気に入られた重田さんがお前はウイグル人だと言われ、本人もその気になって、盛り上がった一夜。不成功の失意の中でなんとなく慰められる一夜だった。